

## 17 The Erie Canal

### 1. 歌の時代背景

アメリカ合衆国の北東部に五大湖の一つエリー湖がありますが、この湖畔にあるバッファローの町とハドソン河畔にあるオールバニの町を結んでいるのがエリー運河です。

1825年に完成しましたが、それまで新世界へのヨーロッパ人の入植は、もっぱら東部の海岸地域に限られていたものが、これによって西部への移住・開拓が盛んになったと言われます。そして当時乗客や貨物をのせて運河を航行したのは、ミュールが曳くバージ（平底船）でした。

これは運河の兩岸にある曳舟路（Towpath）に沿って、バージに結んだロープを数頭のミュールが曳行するというものでした。

このシャンティはそのミュールが主役です。元々は“Low bridge, everybody down”（1918年）として有名になったのだそうです。

詩の内容はディーゼルエンジンの発明により、バージが機械化され、時代遅れとなったミュールの組織を明け渡すことに対する反動歌です。恐らく、この老御者とサルにとってこの日が最後の仕事なのかもしれません。

### 2. 歌の日本語訳

私は一頭のミュールを手に入れた、彼女の名前はサル、  
エリー運河を15マイル。

こいつは申し分のない働き者だし、それにとってもいい相棒だ、  
エリー運河を15マイル。

俺達も若い頃は一度に何隻かのバージを引っ張ったもんだ、  
材木や石炭や干し草を満載したやつをな、

それに俺達はオールバニからバッファローまでの道程なら隅から隅まで知っている。

(コーラス)

低い橋だ、みんな座ってくれ！

低い橋だ、俺達はまもなく町に着く予定だから！

それにエリー運河を航行してりゃ、

何時だって隣の人と知り合いになるし、

何時だって仲間と知り合いになるさ。

なあ、相棒よ、お前もそろそろ自分の好きなように暮らした方がいい、  
エリー運河を15マイル。

俺は決してサルと別れるなんてことはしないと誓うよ、  
エリー運河を15マイル。

そら、進むんだ、サル、水門に来たぞ。

俺達6時位にキャロムに着けるだろう。

あと一回のお勤めだ。そうすりゃあ、俺達は

バッファローに向けて、まっすぐ家に帰れるぞ。

註) 1. ミュールは驢馬と雌馬とのあいの子です。非常におとなしく、力持ちで、しかも馬に比べ、餌や水を余り欲しがらず、暑さや寒さに強く、その上病気にかかり難いなど、多くの利点を持っています。従って、当時は大変重宝がられたようです。

2. 最後のフレーズにロームと言う知名が出てきますが、これはパッファローとオールパニイの間にある小さな町で、勿論イタリアのローマとは異なります。

3. 因みに、インターネットで検索した処、パッファローとオールパニイを結ぶこの運河では、現在も地元の企業が、観光の目玉として当時を再現してミュールに曳かせた Packet Boat) のクルージングを毎日2回運航しているようです。

(解説・日本語訳) 宮崎多加雄

帆船日本丸男声合唱団用資料  
№2-019